

扁平上皮癌、小細胞癌、大細胞癌の順であった病期分類ではⅠ期12例、Ⅱ期15例、Ⅲ期33例と進行癌が多い傾向であった。初発症状では咳嗽が50%と最も多かった。X線分類では、肺野腫瘤型44例と最も多かった。気管支造影所見では、閉塞中断、不正形閉塞、尖形閉塞など閉塞所見が35例にみられた。気管支鏡所見では、腫瘤可視、浸潤狭窄、閉塞などの直接所見が30例、間接所見13例であった。経気管支鏡細胞診及び生検陽性率は80%、83.3%であった。治療は手術例12例、非手術例48例であり、これらの延命効果は、当然の事ながら手術例が有効であり、早期発見、早期手術の重要性を強調した。

8. 肺癌に対する気管支動脈内制癌剤注入の効果発現機序についての考察

久留米大学第一外科

安部秀彦, 武田仁良
猪口轟三, 脇坂順一

家兎のBrown-Pearce 移植肺腫瘍を対象とし、支配動脈より制癌剤を投与し腫瘍への効果ならびに支配動脈内腔におよぼす影響について検討した。制癌剤はMMCを使用し、体重1kg当り1~4mg各群に分け注入した。この他2mg投与群については反復投与を行った。これら制癌剤投与群とは別に腫瘍支配血管の結紮・離断を行い腫瘍への影響についても比較検討した。腫瘍細胞に中等度以上の崩壊効果をもたらすほどの濃度では気管支動脈への影響は予想外に強く、血流障害を指差する変化を呈していた。制癌剤のone-shot 注入、並びにその反復投与の腫瘍に対する効果発現は制癌剤投与直接の効果もさることながら薬剤注

入に伴う支配血管への影響による二次的効果も無視できないように思われる。

9. 肺癌に於ける気管支動脈内MMC one-shot 注入療法—主にX線所見からみた効果について—

鹿児島大学放射線科

園田俊秀, 小山隆夫
田之畑修朗, 篠原慎治
国立鹿児島病院 牧野孝昭,
国立南九州病院 伊東隆碩

最近我々は放射線治療あるいは根治的手術に先立ってroutineにMMC 20mgをone-shot 動注し、その一次効果を2週間に亘って観察している。今回はこれら一次効果を観察し得た原発性肺癌18症例について、胸部X線像上の効果を検討し、若干の知見を得たので、症例の供覧とともに報告したい。肺野部肺癌では11例中7例(64%)にMMC one-shot 動注が有効であり、肺門部肺癌7例については無気肺型の3例に有効であった。組織型別には縮小効果に差は認められず、vascularityの高度なものほど縮小効果が著明な傾向にあった。また腫大した肺門部リンパ節については著明な縮小が7例中3例にみられた。尚重篤な副作用は認められなかった。

10. 肺癌における気管支動脈造影の臨床的価値の検討

長崎大学放射線科 長崎○二
林 邦昭, 村昭二郎
前田広文, 稲月伸一

目的:①他疾患との鑑別,②組織型の推定,③進展及び腫瘍の大きさ, 範囲の判定,④リンパ節転移の判定

対象:原発性肺癌の手術例51例
方法:上記症例の気管支動脈造影所見と手術標本所見とを目的の項目につき比較検討した。

結果:①気管支動脈造影にて肺癌と診断できると思われるものは41%であり、慢性肺炎の一部や肺真菌症等と鑑別の困難な事がある。②組織型の推定は極めて困難である。③腫瘍の全体または辺縁が認識できるものは27%しかなく、単純写真、断層で腫瘍の大きさが不明な5例は、いづれも気管支動脈造影でも不明であった。④リンパ節部に悪性血管像を認め、転移と判定したものは7例あったがいづれも単純写真や、断層で指摘可能であった。

11. 肺癌の診断における逆行性奇静脈造影の有用性について

鹿児島大学放射線科

小山隆夫, 園田俊秀
田之畑修朗, 篠原慎治
国立鹿児島病院 牧野孝昭
国立南九州病院 伊東隆碩

肺癌における縦隔部侵襲の有無をみるべく逆行性奇静脈造影を実施し2~3の知見を得たので報告した。検討対象20例中9例に異常所見がみられ、異常所見としては圧迫像が7例と最も多く、リンパ節腫大を反映しているものと思われた。異常所見出現頻度は肺門型・肺野型の間に差は認められず、また下葉のものでは上葉のものに比べて高くなっていた。N因子別では、N₂症例全例に異常所見がみられ、N₀・N₁と考えられたものでも約1/3に異常所見がみられ、縦隔侵襲が明らかになったものがあり、肺癌例における本法の有用性が示唆された。病期別では、病期の進行につれて異常所見出現頻度が高くなり、病期の進行度を比較的忠実に示すものと思われた。

12. 肺癌手術における肺動脈部分ないし分節切除併用例の検討

九州支部

長崎大学第1外科 綾部公恣
中尾 承, 川原克信
永野信吉, 大曲武延
内山貴堯, 中村 讓
辻 泰邦

宮崎医科大学第2外科

追田耕一郎, 鬼塚敏男
柴田紘一郎, 古賀保範
富田正雄

肺癌に対して肺葉切除術に加え癌浸潤のみられた肺動脈の部分ないし分節切除を併用した症例を検討し報告した。肺動脈壁への癌浸潤は局限しており、これを合併切除することにより肺機能を温存し、かつ癌に対する手術の根治性が向上するものと考えられた。肺動脈の部分切除を併用したものは2例、分節切除を併用したものは5例であった。分節切除5例中4例には気管支成形術も併用した。部分切除併用の1例は術後7年4ヵ月、分節切除併用の1例は術後3年の現在、いずれも再発なく健在である。

13. 進展例にも拘らず、長期生存した肺癌例の検討

九州がんセンター 大田満夫
飯田 彰, 植田英彦
安元公正, 真鍋英夫
堀江昭夫, 琴尾泰典

当院入院加療の原発性肺癌350例のうち、遠隔転移を有してから、あるいは試験開胸に終ってから、3年以上生存した症例が6例あった。3例は試験開胸後で、第1例はAdenoid cystic ca.で4年8月健在、第2例は高分化腺癌で術後4年1月で死亡、第3例は気管支粘液腺由来の粘液産生腺癌で術後7年で死亡。対側肺転移を認めた例は3例で、第4例は高分化腺癌で3年2月で死亡、第5例は粘液産生の多い腺癌で、4年8月通院治療中、

第6例は、対側肺転移巣も切除した高分化腺癌で、5年5月外来治療中である。

長期生存の最大の因子は、腺癌系ではあったが、すべて高分化であったことと思われ、急速悪化を末期に生じた2例は、低分化腺癌に悪性化していた。

14. 肺癌の非治癒切除例の手術成績

国立療養所再春荘外科

岩崎健資, 山田 紘
小清水忠夫

昭和34年から51年まで国療再春荘で切除された肺癌48例の中、非治癒切除は30例62.5%と最も高い頻度を占め、その遠隔成績は1年生存率80%、2年生存率58%、3年生存率32%、4年生存率29%および5年生存率25%で、3年以降急激に下降している。

合併療法では放射線療法が最も偉力を発揮し、左全摘が出来ずに照射した症例でPapanicolaou陽性のため左上葉切除した2年半健在例や左上葉切除術後癌性胸膜炎となった症例に照射して治癒し、2年半健在の2例は扁平上皮癌であった。その他、や、有効な腺癌の2例があり、非治癒切除後のirradiationの重要性を強調した。一方化学療法や免疫療法で癌を治癒に導いたり、再発を防止したと言う積極的効果の見られた症例は未だ経験していない。作用機序の緩徐な故であろう。

15. N₂を伴う肺癌とその対策

久留米大学第1外科 八塚宏太
福島 駿, 喜多隆昭
武田仁長, 猪口轟三

私共が日常遭遇する肺癌症例は、Stage II~IIIのadvanced caseが多く、当然N₂前後の転移リンパ節を伴っており術後の5

生率も極めて不良である。また縦隔転移リンパ節郭清に際し手技的に郭清の困難な対側縦隔転移リンパ節は問題である。ここで私共はemulsion化した制癌剤(5Fμ)をStage II~IIIの肺癌症例に下縦隔より総量5,000mgを目標に術前平均10日間に渡り持続投与した。摘出リンパ節の5Fμ濃度は全身投与した際に比べ高く平均4.2mcg/gであった。また転移リンパ節内の癌細胞の崩壊の程度もgrade IIbを中心に多彩な変性効果が得られ、4,000Rad前後の照射効果に匹適していると考えられた。組織型別では扁平上皮癌での効果が高く腺癌ではやや変化に乏しかった。当方法は肺癌手術の補助療法として有用であろう。

16. 肺癌における脳転移症例の検討

長崎大学第1外科

内山貴堯, 川原克信
中尾 丞, 永野信吉
大曲武征, 綾部公恣
中村 讓, 辻 泰邦
長崎大学脳神経外科 米倉正大
宮崎久彌, 藤田雄三
小野博久, 森 和夫
宮崎医科大学第2外科

富田正雄, 古賀保範
柴田紘一郎, 鬼塚敏男
追田耕一郎

肺癌の脳転移症例は14例あり、扁平上皮癌4例、腺癌4例、未分化癌6例である。肺癌発症より脳転移までの期間は未分化癌は全て1年以内で、扁平上皮癌、腺癌は1年以上が多く、長期の化学療法が必要である。脳転移巣への治療は手術3例、放射線+化学療法1例で、化学療法10例である。手術群と非手術群の間に生存期間の差があり、手術群には長期の生存例もあり、適